

# 東京日々新聞

四百卅一號



盆過ぎて宵闇さらき永代の橋間流ゆる家根船の小窓より  
 せりて橋上より投ひまゝの女子ありき一と聲と  
 あげおふるまひてたを呼ぶのこゝろ  
 せん術波間ふたよと詠ふり三浦  
 某君々夫たすけを情のひと言  
 船人さうろ得

一萬海  
 女方後虫  
 入水の子細と尋問し是は中橋  
 和泉町の浅野又兵衛が召仕にて  
 安房國館山町の榮茂七が娘をそと十七  
 年五月小あれる者ありなせも深川小西要  
 ありて越き帰るに永代橋のな中して四十  
 歳余の斬髪男矢庭小を引捕へ懐中の  
 金三圓と奪取らんあまの天川中へいられ  
 多のよるあを三浦君やう憐れ玉ひてあゝの方へ  
 送り遣せよと側の人々も命したる程小舟の濱  
 町の河岸あたる石折の十七日の月の中なる本所方  
 二一の舟りて夜の初更あそありなる黙化老人識

具足屋 渡辺彫栄

